

神月大徳歳

芳井区

● 第8回げんでんふるさと文化賞  
芸術新人賞受賞者インタビュー

● 継体天皇即位1500年  
「越前出自の継体天皇(中)」

● ふるさと福井  
人物シリーズ 「松平春嶽(中)」





財団シンボルマーク

財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的としています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にしたい広報誌を目指します。

## CONTENTS — 27

- 第8回げんでんふるさと文化賞 芸術新人賞受賞者インタビュー …… 2
- 継体天皇即位1500年 「越前出自の継体天皇(中)」 …… 4
- ふるさと福井・人物シリーズ 「松平春嶽(中)」 …… 6
- 第9回ふるさと大賞写真コンテスト …… 8
- ふくいの伝統行事シリーズ 「勝山・左義長」 …… 10
- 敦賀市立博物館誌上ギャラリー／21 …… 11
- 福井の文学碑 「作家・詩人 中野重治」 …… 12
- 吉田浩之プロデュースオペラ「角鹿の魔面」熱演 …… 13
- 第9回 能・狂言を楽しむ会 …… 13
- 情報ファイル …… 14



### FRONT COVER

勝山市指定  
無形民俗文化財  
「勝山・左義長」  
(勝山市)

二百年以上の歴史がある「勝山左義長まつり」が2月24日(土)と25日(日)の二日間、本年の五穀豊穡と無病息災、鎮火を祈願して盛大に催されました。

勝山市街地の本町通りや後町通りその他で十二基の櫓が建てられ、その上で赤い長襦袢で女装した太鼓の打ち手が、三味線、笛、箏による軽快なリズムでお囃子に乗って太鼓をたたきながら浮かれ踊ります。

各通りにユーモアと世相風刺の川柳が詠まれた「遊行櫓」や干支にちなんだ作品を日常生活用具を用いて作られた「作り物」などで飾らわ多くの客を楽しませていました。

この祭りが終わると奥越地方に春が訪れると言われています。

(関連記事)10頁 ふくいの伝統行事シリーズ

## 第8回

(平成18年度)

## げんでん

## ふるさと文化賞 芸術新人賞

## 豊田さん(洋画)・上原さん(洋画)・長谷川さん(川柳) 櫻井さん(書道)・後出さん(剣詩舞道)

### 受賞者インタビュー

#### 最限のない創作と 地域活動に尽す



豊田 三郎さん  
(福井市)

豊田さんは高齢者でも衰えない程若く元気です。「私の受賞は予期しないことで、皆さんの功績です。私をとりまく社会に感謝しています。作品に表わすことは苦行であります。簡単にやめられない魅力があり、幸福感を味わうことができ有難いことです。」と感謝の言葉をいただきました。現在、地

#### 「若狭」に情熱を燃やし続ける



上原 徳治さん  
(小浜市)

上原さんは、洋画家として小浜市役所に勤務しながら創作活動を続けてこられ、今も若狭の

元で絵画や地域活動の指導をされていますが今後の抱負をお伺いしますと、「生かされて来つつ思えばかにかんにふるさとなくにわがあらめやわ」と豊田さんのふるさと賛歌の一部を披露され「ふるさとのお陰で生かされている以上、如何なる人もふるさとを愛護させる為に創造や活動に尽力すべきであり、命終りの日まで更に、ふるさとの為に情熱の限りを燃焼し尽す覚悟であります。」と美山地区の皆さんとともに後進を育成し、愛郷心や生産愛を持つ大切さを伝えていきたいと熱く語っていました。



### 第8回げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞 表彰式=2月7日 日本原電敦賀地区本部

財団では、2月7日(ふるさとの日)に第8回(平成18年度)げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞の表彰式を日本原電敦賀地区本部会議室で行いました。

前川財団理事長から受賞者一人ひとりに賞状、賞金、顕彰額を贈り栄誉をたたえました。

五名の方々に、受賞の感想や地域文化活動の抱負などをお聞きしました。

## ふるさと文化賞

**豊田 三郎さん(洋画)**  
福井市津波原町(98才)

昭和13年豊田美術学校現武蔵野美術大卒業、美山中学校美術教員などを勤め、退職主義をポリシーに一貫して旧栗山町の杉をモチーフにふるさと「福井の風情を盛り込んでいます。平成元年「ふるさとの山」がサロン・パリ展で大賞を受賞されるなど海外展にも発表し高い評価を受けています。

現在、地元栗山地区で「スケッチ大賞コンクール」・「絵画教室」や地域づくりのための「豊田展」を開き、また文芸誌「ふらふら」を発行し後進の指導にあたるなど、地域に根付いた活動をされており、地域文化の発展に大きく貢献されています。

**上原 徳治さん(文化活動・洋画)**  
小浜市遠敷(74才)

日本児童文芸家協会会員、若狭美術協会会員、「ふるさとのおぼろ」・「福井のおぼろ」・「福井の四季」などの民話等の著しと絵巻を多く描いてきており、心温まる独自の作風は多くの人を魅了しています。

平成8年から18年まで、山川書業を撮影する「若狭を撮る」実行委員長として、全国的な規模の大会を開催し、福井県をアピールするなど、若狭の文化・マツの発展と向上に大きく貢献されています。

現在は公民館や学校等などで後進の指導をされています。

**長谷川 芙美女さん(川柳)**  
鯖江市堀町(87才)

昭和28年福井商工会に入会して以来、54年間川柳一筋で活躍されています。

昭和29年鯖江市川柳会会長、昭和37年より、鯖江市川柳会会長、平成元年より福井県若狭若狭若狭川柳会会長を務めています。

平成元年鯖江市川柳会創立50周年を記念して句集を発刊、堀内川柳作家の育成に努めるなど川柳の普及発展に尽力されました。

現在も、川柳作家および読者として、またカルチャー講座で後進の指導にあたるなど、地域文化の向上のために活動されています。

## 芸術新人賞

**櫻井 孝江さん(山吹)さん(書道)**  
福井市つくも(38才)

平成12年東京芸術大学連合大学院博士課程修了、今村桂山氏に師事。

平成10年第30回、平成11年第31回、平成13年第33回日展に入選するなど、書道活動に意欲を燃やし専念され、平成10年第28回福井県書道展書道賞、平成13年第29回若狭若狭若狭書道展賞を受賞されています。

現在は、書道教室「山吹」を開き、小学生、中学生、高校生をはじめ社会人と書道を志す後進を指導されており、本県書道会の発展に寄与され、活字の活躍が期待されています。

**後出 和子さん(刺繍)**  
坂井市丸岡町西丸岡(35才)

昭和63年真珠刺繍刺繍道楽会今尾節氏に師事し研鑽を重ね、平成8年全日本刺繍連盟第5次青年十傑に選ばれ、平成16年真珠刺繍刺繍道楽会となり新しい時代にマッチした取り組んで全国大会などで活躍しています。

また、坂井市内の公民館で子ども刺繍を指導し、青少年の情操教育に力を注いでいる他ボランティア活動として、県内の老人ホームなどを訪問して刺繍を指導しています。地域文化の向上と伝統芸術の発展のために今後の活躍が期待されています。

**川柳 一途 長生きの秘訣**

長谷川さんは、仕事をしながら川柳をラジオ放送で聞いてこれだと思い川柳を書き始めたそうです。「好きな川柳を通じて人間として豊かになりたい。また市民文化の向上につながる川柳の創作一途でありました。身に余る栄誉を

「川柳は、人間の喜怒哀楽を考え、また目や耳で学ぶために歩き、頭を使うことが血流をよくする。これが長生きの秘訣だと思っています。これからも更に研鑽を重ね、一人でも多くの方に川柳の素晴らしさを知って楽しんでいただけたらと思います。ふるさと文化の向上に少しでもお役に立ちたい」と若々しく今後も活動していくことを語っていました。

「若狭にこだわって活動を続けてきた各分野の多くの先輩や仲間のお陰であり感謝しています。今回の受賞が仲間連へのエールだと思っております。また、「若狭」へのこだわりと愛着が原点だと思っています。若狭の種やかな風土、個性的な文化、まろやかな人情などへの限りない愛情が私の芸術活動の背中を押してくれている。これからも、更に精進していきます。」と語ってくれました。

美術以外に地域文化の向上については、「中央志向ではなく、各ジャンルの芸術活動に携わる人たちのネットワークを大切に、これからはますます若狭にこだわって情熱の火を燃やし続けたい。」と熱い抱負でした。



長谷川 芙美女さん  
(鯖江市)

「字を書いていると楽しい」を「広げていきたい」

「新人賞受賞は、今村桂山先生はじめ諸先生方のお陰です。」と感謝の櫻井さんは、「書始めた

「詩の心」に共感し  
「心からの舞」を目指して

「書」という広大且つ深遠なる世界の光をまだ運がかなたに見えている私にとって今回の受賞は、身に余る光栄です。光をより身近に見える私になります。これからも精進します。私の書道教室に「字を書いていると楽しい」という子供がいます。私は、こう思う「世界を広げていくため、一人でも多くの方々と共に精進していきたい。」と心静かに熱く語っていました。

今後の活躍が期待されています。



櫻井 孝江さん  
(福井市)

「心からの舞」を目指して

今尾宗家をはじめ多くの先生方と共に頑張りたいと励ましていたたいた門人の皆さんに感謝します。「この新人賞は、応援してくれる家族や今まで世話になった全ての皆さんで頂いたものです。」と語り、これまでの取り組みについては、「心技・体」とは素晴らしい言葉で、私の目標です。「礼に始まり、礼に終わる」貴重な時間の中で、「お互いが心を通わせ、共感することが大切です。詩の心に自ら共感し、それを伝える「心からの舞」を目指して勉強しています。」と語られ、「古典的なものも、新しいものへのチャレンジし両方でできる刺繍舞道家になるため、人生すべてが勉強という謙虚な気持ちで精進し、刺繍舞道を通じ、世の中に貢献できればと考えています。」と姿勢正しく凛として今後の抱負を語られました。今後の活躍が期待されています。



後出 和子さん  
(坂井市)

継体天皇即位一五〇〇年

# 越前出自の継体天皇(中)

## — その検証 —

文:青木豊昭

筆者プロフィール



青木 豊昭氏  
Toyoaki Aoki

1944年、福井県生まれ。福井大学教育学部卒業。福井県立博物館学芸課長、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター次長、同所長を経て現在、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館長。共著「日本城郭大系11」「継体天皇の謎に挑む」「福井県史通史編—原典・古代」「福江市史通史編上」「前方後円墳集成中部編」「継体大王と越の国」「福井県不忠謀事典」他。近著(2006/8/1刊行)「越前若狭地域史の謎に挑む」

さて、今回は「日本書紀」や「古事記」の伝える継体天皇、越前出自説の検証である。

このことについては「古事記」の伝える近江出自説もあって定説はなく百家争鳴の態があり、諸説紛々の状況である。それゆえにプロ・アマを問わず多くの人が古代ロマンをなお一層駆り立てられ、その真相を解明しようと日夜努めている。

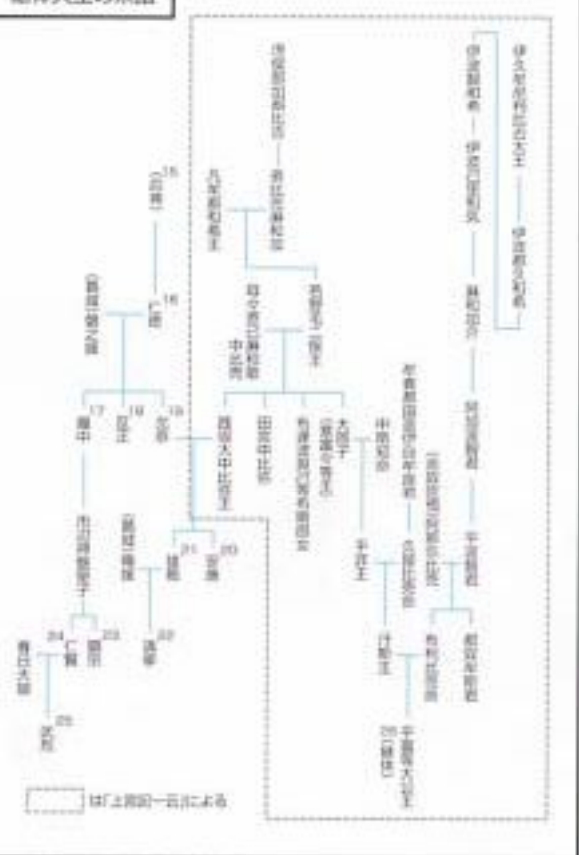
ここでは、越前出自説を探る目説を明らかにしたい。

### 一 父方は天皇家に繋がる名門、母方は越の国随一の豪族

継体天皇の父方は惣長氏(近江)とされ、曾祖父は意富々等王である。その妹が陸坂大(比佐)主(忍坂大中姫命)で允恭天皇の皇后となり子が安原・雄略の両天皇となっている。主の子乎非王が牟婁都(倭)造(美濃)の女を妃とし、継体天皇の父行斯王(彦主人王)を生んでいる。

現在、宮内庁によって継体天皇陵に指定されている大阪府茨木市にある太田茶臼山古墳(前方後円墳、二二六m)を意富々等王の墓とし、高槻市にある今城塚古墳(前方後円墳、一九〇m)を真の継体天皇陵とする説が多く、この辺りにも父系の大きな拠点があったと考えられる。

継体天皇の系譜



継体天皇とその父母の系譜

一方、天皇の母方(振姫)は三尾氏(越前)で、父平波(磐石)の妻は余奴(江沼)氏(加賀)の女である。「国造本紀」によれば羽咋国造(能登)・加我国造(加賀)も同祖である。振姫が男大連主(後の継体天皇)を連れて戻った実家は「三尾坂井(高向)」(越前)である。

高向は坂井郡十二郷の一つで、式内社高向神社もみられ、坂井市丸岡町南部から南東部にかけてで、九頭竜川右岸の平野部に位置している。ここには四世紀中頃の古山古墳出土と伝える牛ヶ島石棺があり古くから有力な豪族のいたことがわかる。

また、近くの山々には四世紀中頃から五世紀末にかけての越前地域の歴代の大首長の古墳が六基ばかり築かれている。これらはいずれも前方後円墳で、高向の地を一望することができる。その規模はそれぞれ越の国では最大級を誇る。

しかも、どの古墳も割版式の石棺をもつ。越の国の前方後円墳で、割版式石棺をもつのはこれら大首長墓のみである。格式の高さがうかがえる。

なお、これらの古墳の出土遺物の一部が判明しているが、二本松山古墳(五世紀後半・九〇m)出土の鍍金冠・鍍銀冠は国



7代越の国・二本松山古墳

江戸時代後期に発見された古墳で様々な伝説が地元では残っています。標高273.1mの松岡丘陵の山頂に立地する。加賀市から越前市までを眺望することができ、視界の勢威を感じることができます。明治39年に発見された石棺からは、金、銀の鍍金した冠や甲冑類が出土しています。(永平寺町和宮、真訪集地区)



鍍金冠 (東京国立博物館)



鍍銀冠 (東京国立博物館)

内でも古く、朝鮮半島の加耶地域の影響がみられる。さらに鳥越山古墳(五世紀中頃、六五m)の横穴式石室は北部九州系である。いずれも日本海を通過してもらたもので、最新の文物を手に入れていることに驚かされる。越前は古来、大陸文化の流入口で幅広い情報をもたらされ、とともに、高い技術や文化が育まれてい

たのである。

振姫はこの越前の大酋長の系譜に繋がる人物と考えられるのである。

## 二 天皇の妃からわかる 継体天皇擁立の豪族連合

現在はさておき、結婚はいつの時代にも有力者にとっては政略的である場合が多い。

継体天皇の妃は合せて八人いたと伝えられているが、地域的に分けると次のようになる。

- 越前＝尾角折君の妹・三尾君皇極の女
- 近江＝坂田大野土の女・皇長皇子土の女・根王の女
- 尾張＝尾張運草吉の女
- 河内＝次田連小望の女
- 大和＝和珥臣河内の女

これらの妃の出身地は畿内二人、畿外六人となり、畿外東辺出身者が多く、畿内でも東北部出身である。八人の妃を出した各地の豪族が継体天皇擁立の主勢力であり、皇位につくことを勧めた河内馬飼荒屠もこの勢力に与していたことはいままでもない。

この勢力に当時ヤマト王権内で最も勢威のあった大伴金村が加わり、武烈天皇の姉の手白香皇女を皇后とし、継体天皇擁立となったのである。

## 三 天皇に二人の妃を出した 三尾氏の奥津城・横山古墳群

継体朝から欽明朝にかけて越前で最も隆盛を見せる古墳群が横山古墳群（あわら市・坂井市）で、越前の大酋長墓もここに移動。

古墳群は福井平野の北東隅に位置し、竹田川と清滝川に挟まれた南北約三千口の横山の山上や山麓にある。約二四〇基の古墳からなり、畿内最大級の古墳群である。特に越前の前方後円墳の約五分の一近くの二〇基が集中し、特に六世紀代の前方後円墳が二一基あり、継体天皇との関わりで注目されている。

これらの前方後円墳を規模別にみると、五〇m級二基、四〇m級三基、三〇m級二基、二〇m級四基である。継体天皇ゆかりの越前・近江においても、当該期の古墳がこれほど数多く築かれているところは他にはない。継体天皇の父蔭主人王の別業（別荘）のあった近江の三尾（滋賀県高島市）の古墳は横山古墳群にはとも及ばない。

この古墳群の眼下にあわら市御簾尾町がある。この辺りが「三尾（水尾）」の故地と考えられている。「坂井郡水尾郷」「三尾駅」が坂井郡の北部と考えられることから理解できる。

つまり、この辺りが継体天皇に二人の妃を出した三尾氏の本拠地と考えられ、横山古墳群をその奥津城（墓）ととらえることができる。当該期の古墳が南端（四基）と北端（六基）とに二極化してまとまっており、近くの鎌谷窯跡の埴輪や須恵器が両方に供給されていることから納得できる。さらに埴輪製作技法が継体天皇とゆかりのある尾張や江沼とのかかわりが深い事実を考えるとなおさらである。この地が継体天皇越前在任中や在世中の大きな拠点であったと考えられるのである。

## 四 若狭の豪族膳臣 —影の立役者—

若狭最大の平野を流れる北川の中流域とその支流である鳥羽川流域とに若狭の大酋長墓が六基ばかりある。いずれも前方後円墳で、地方の古墳としては異例の三段築成で周濠をもつ。五世紀前半から六世紀前半にかけての歴代の古墳である。特に継体朝から欽明朝にかけての時期には北陸最大規模となる。継体天皇擁立に大きな功績のあったことが想定できる。

この若狭の豪族については中央で活躍する膳臣と考えられている。根拠として二点を挙げる。

膳臣は腹中・允恭朝の膳臣余磯（荒磯命）を初めとし、雄略朝の膳臣長野・膳臣斑鳩・安閑朝の膳臣巴提肥などがいて、単に朝廷の食膳に関わるだけでなく、国の内外を問わず使節や将軍などとして活躍している。この膳臣の活躍と古墳の実態とがうまく重なるからである。また、膳臣余磯が若狭国造であることや、若狭部臣



金銅製冠帽(福井県立博物館蔵) (中書の新古墳(若狭町天徳寺)出土)

の祖で磐余若狭宮の原因者となっていることなど若狭(若狭)との関係が深いことである。

膳臣の本拠地若狭は越前に隣接し、かつ継体天皇擁立豪族連合に近接し、大和での拠点(奈良県橿原市膳夫町付近)が、大伴氏と蘇我氏との間にあり、天皇に近侍し食膳を司り大伴氏の下に属していたのである。

このような位置にいた膳臣が継体天皇擁立に当たって大きな役割を果たしたと理解できる。それゆえに、即位後二〇年目(一説に七年目)に大和に入った天皇が、大伴氏や膳臣の拠点近くに磐余玉穂宮を営んだのも納得できることである。

紙数の関係もあって詳細に記載できないが、「日本書紀」「上宮記」の内容と最新の考古学の成果とがうまく合致し、これらの記事が語る継体天皇越前出自説のみを否定する理由は全くないのである。「古事記」の継体天皇近江出自説は父方を重視した結果によるものと考えている。今後とも研究を続けたい。

今回は、越前における継体天皇伝説とその生成についてみてみたい。

# 松平春嶽

リーダーの的確性・平和変革路線

(中)

文/三一夫

## 筆者プロフィール



三一夫氏  
Kazuo Mikami

1921年朝鮮京城府生まれ。京城帝国大学史学科卒業。福井県立大野高等学校長・福井県教育研究所長などを経て、現在福井工業大学名誉教授。1989年に福井県文化賞、2004年に福井新聞文化賞を受賞。主要著書に『公武合体論の研究—越前藩幕末維新史分析』、『福井小楠の新政治社会像』。最近では『幕末維新と松平春嶽』など多数。

## 内助の功の勇姫

春嶽の正室勇姫は、熊本藩第十二代藩主、細川斉護の三女で、天保十一年（一八四〇年）五月、七歳のとき、当時十三歳の春嶽と婚約した。

ところが彼女は間もなく痘瘡を患った。精いつばいの治療の結果、ようやく一命は取りとめたが、病気による「あばたが顔に残ったので、細川家では福井松平家への気兼ねから、春嶽との婚約を解いて欲しいと申し込んだ。

これに対して春嶽は、「いったん御約定のうえは、たとえ御片輪になったとしても、少しも氣に留めることはない」と言い

張ったという（『慶永公御行実』）。たしかにこの春嶽の心遣いには誠に胸を打たれるものがある。

嘉永二年（一八四九年）十一月、勇姫は十六歳で越前家に入られたが、それに先立つ九月、春嶽は家老、世治大学を呼び寄せ、彼女の居所にかかる「大奥向一統心得」の直書を手渡した。

そのなかで、「家風を大切にしていかに守ること。勇姫を大切にしていかに守ることが、女中たちはお互いに仲良くして、少しでも疎情を挟むようなことはよろしくない。また勇姫の機嫌・調子をとって無益の雑談に及ぶようなことはしないで欲しい。要は奥向きがうまくいかなければ、夫婦仲も「蟻の穴より堤の崩れ候蟹」のように壊れる恐れがあるので、よく心得ること。細川家は本身の旧家であるが、当家にこし入れた以上は、勇姫はもろろん侍女たちも、当家の風儀を見習うこと。なお当家の台所の厳しい事情を勇姫や附老女によく打ち明けて質素の風をしっかりと守って欲しい」（『奉告記事』）と力説したほどである。

勇姫が嫁いでからあつらえた牡丹模様小袖

このような春嶽の要請に勇姫はよく応えて、自ら率先して懐約

の二本を大奥に示すなど、春嶽のさまざま改革事業にも、できるだけの協力を惜しまなかったのである。

また春嶽は滞在する江戸や京都から、国元の福井藩主茂昭あての手紙のなかではその都度、城内で暮らす勇姫と、春嶽の生母青松院の安否をうかがうという気遣いようであった。

## 水戸天狗党への対応

水戸藩内での抗争に敗れ、また攘夷の決起にも不覚をとった浪士勢（天狗党）は、党の全力をあげて西上し、当時禁裏守衛総督として京都に駐在する一橋慶喜に対して、挙兵の素志を訴えることを決めた。それは、元治元年（一八六四年）十月二十六日のことで、総師を武田耕雲斎とする総勢千余人が、十一月一日、常陸久慈郡大子（現、茨城県大子町）を出発した。

西上の途上での諸藩との交戦をできるだけ避けながら、十二月四日、美濃・越前の国境である蛸帽子峠を越えて、越前に入ったが、厳しい降雪のなかでのかれらの難渋は筆舌に尽くしがたかったに相違ない。さらに木ノ本・油田・今庄を経て、木ノ芽峠を越え、敦賀郡新保に布陣したが、その



武田耕雲斎之死塚（福井城跡で出土）

前面には、加賀藩兵が警備の態勢をとっていた。一方福井藩では、幕命により春嶽が十二月十日、福井城を出て府中（越前市）に宿陣、家臣の本多勢が今庄辺まで出兵した。当時近江の大津に天狗党追討軍の総師として出陣していた一橋慶喜から、福井藩に対して追撃の厳命が発せられたが、春嶽は無抵抗な彼らを気づかずに、応じなかった。なにぶん進退きわまった天狗勢は、加賀藩を通じて嘆願書を慶喜に届けたが、拒否されてしまった。浪士勢はついに加賀藩の軍門に下った。

一同は敦賀に送られ、翌慶応元年（一八六五年）の二月、斬罪はじめ連島・追放などの厳しい刑に処せられた。この際、斬首太刀取りを藤根・福井・小浜の三藩に指令されたが、福井藩だけは、藩士に不浄人のま

ねはさせられないと拒否した。春嶽は、幕府の可成な仕打ちには、甚だ本意であり、その責任の一半は慶喜にあると、残念がったのである。

こうして大御党事件が引き金となって、明治維新後も水戸藩内では、激しい党争のなかで、有能な人材はすっかり底をつく羽目になった。この点、福井藩では幕末維新期を通じて、目

立った派閥抗争は見られず、春嶽が主導する「公議論」路線で藩論が一応まとまっておき、血で血を洗う党争にあけくれた水戸藩とは、きわめて対照的だといえる。

## 復古後の苦難な道

慶喜三年（一八六七年）十月十四日の「大政奉還」後、福井・土佐両藩が大いに期待を寄せた列藩会議の成立しないうちに、薩摩・長州両藩の主導する武力討幕派による十一月九日の「王政復古のクーデター」に見舞われる。そして同夜の小御所会議で、徳川家の処分につき、岩倉・大久保ラインの強硬意見がとあり、徳川慶喜に辞官・納地・つまり官位辞退と幕領返上を命ずることに決まった。かねて春嶽の主張する「公議論」による話し合いの場が、討幕派勢力によって封じ込められた格好となる。

そこで、慶喜に薩官・納地を求めるための直接交渉であるが、この大役を春嶽と尾張藩の徳川慶勝の二人が引き受けねば



水戸藩士勢の西上行程  
（「敦賀市史」通史編上巻より作成）

ならなかった。当時慶喜のいる京都二条城には、幕兵・会津・桑名の約一万の藩兵がひしめいていた。かれらは、まさに「一戦して薩摩に報いよう」と、ほとんど狂わんばかりに、叱咤・憤慨・殺意大を衝く」（徳川慶喜公伝）という有様だった。

こうして、いつなんどき御所側と旧幕府側の軍勢が激突しかねない状況のなかを、春嶽は慶勝とともに、二条城に向き、

慶喜と面談して、辞官・納地をかれに納得させる大役を果たした。春嶽は、そのときの死を覚悟した心境を、かれの手記「逸事史補」のなかで、率直に述べている。  
なにぶん春嶽が一番心配したのは、大がかりな内戦を引き起こすおそれのあることであった。ところが一触即発の段階で、慶喜が春嶽の意見に従って同月十二日大坂城に移ったため、内戦の危機は一日免れることができた。

## 慶喜への救済活動



松平春嶽座像

実は、前述の「王政復古」後、西郷隆盛らは、徹底的な武力討幕をねらって、江戸の治安をかく乱し、旧幕派を挑発する挙に出た。十二月二十四日は旧幕派が三田薩摩藩邸を焼き打ちにしたとの報せで、大坂の旧幕軍や会津・桑名藩兵は大いに憤激し、ついに慶喜の意に反して、京都への進撃を企てた。



一橋慶喜肖像（茨城県立図書館蔵）

旧幕派が大坂京都にむけて進発したとの情報をつかんだ春嶽は、慶喜に軽はずみな行動をやめさせようと、慶喜四年一月三日朝中根雪江に命じて京都を出発させた。しかしそのときはすでに手遅れで、同日夕刻、鳥羽・伏見で西軍の間に戦端の火ぶたが切られた。

旧幕派が政府軍の三倍の兵力をもったにもかかわらず、はじめから敗退の一途をたどった。このことは、慶喜には大変な衝撃であった。彼は六日に朝敵となったことを知り、東帰する決意を固め、同夜、会津・桑名両藩主らとともに大坂城を脱出して江戸に戻った。

江戸城では、小栗忠順らの主戦論を押し、またフランス公使ロッシュからの再挙の勧めも断わり、

恭順の態度をとった。それには、春嶽からの強いアドバイスがあり、また春嶽は、新政府の要人岩倉具視や天皇側近の中山忠能らに積極的に働きかけるなど、内戦を食いとめる懸命な努力を払った。

春嶽は、二月十九日政府に対して、「慶喜が伏罪謹慎したからには、東征軍は速かに停止されたい」との建白を行ったが、すでに慶喜は、同月十二日江戸城から上野寛永寺に移り、一途に恭順の意を示した。春嶽と慶喜はともに、内戦の拡大により、国内での一揆の増発に加え、西欧列強が介入し、半植民地化の危機にさらされるのを、真刻に憂慮したのである。実は中国での「太平天国の乱」の内乱につけ込んで、英・仏両軍が「アロー戦争」（一八五六〜一八六〇年）を強行したことは、すでに文久元年（一八六一年）に春嶽が、横井小楠との話し合いで、よく了解している。



慶喜から春嶽に贈られた洋式軍装馬具（福井市立郷土歴史博物館蔵）

幕末の第二次長州征伐のさいには、慶喜がフランスの援助を求めたのを、春嶽は厳しく批判して、幕府からの征長令には応ぜず、内戦反対を真刻に訴えた。ところが戊辰戦争では、慶喜も春嶽の意見によく従って、内戦には一切かかわらずに、もっぱら恭順・謹慎の態度をとりつづけたのである。

テーマ ここに「ふるさと」がある

# ～ふくいの感動～

第9回

## ふるさと大賞 写真コンテスト

平成十年度より郷土福井の自然、歴史、文化等の地域資源を題材とした「ふるさと大賞」写真コンテスト顕彰事業を行っています。第九回目となる十八年度は、二七〇点の応募がありました。審査の結果、五一八点の受賞作品(別表のとおり)が選ばれました。



ふるさと  
大賞



野尻

時子さん  
(坂井市)

### 「迎春」

降雪の中での左義長の行事をテーマに～ふるさとの感動～をすばらしい感性で撮らえています。3本のどんど焼きと人物の位置と後方のソリで遊ぶ子供たち、雪にくすぶる山など「ふるさと大賞」の写真コンテストの意義を確実に考え、絵にされています。また、雪が舞っていたので、画調もソフトに仕上がりと、雰囲気のある「ふるさと」の感動を的確に捉えられ、趣のある写真となり、「ふるさと大賞」にふさわしい作品になっています。(調評/八木 隆)



岸  
隆介さん(敦賀市)

### 「とうろうの灯に願う」

灯籠をそっと押しやる女性。多くの人々がそれぞれの想いを胸に祖先を送っています。

画面には、紫、緑、青など様々な色が混在していますが、スローシャッターによる柔らかな光で優しく包み込み、ゆらぎの中に見事に溶け合せていきます。

伝統的な感性を加味しとらえた秀作です。

(調評/水谷内 健次)



三國  
清さん(勝山市)

## ふるさと賞

一般の部

### 「母の収穫」

昔懐かしいのどかな光景を見ているだけで心が温まります。山家の玄関先に敷かれた「ござ」は使いこなされた味わいがあります。

収穫した豆がきれいに並べられ、その脇に座り黙々と選別をするおばあちゃん。ぽかぽかとした日だまりの中で気持ちよさそう。

街では考えられないような、ゆっくりとした時間の流れを感じます。背景を暗くすることで今風の白いTシャツなど洗濯物が浮かび上がり、いいアクセントになっています。(調評/勝山 翠司)





# 勝山市指定無形民俗文化財 勝山・左義長

勝山市

## 開国の祭典

「左義長」は、古く平安時代から正月15日に行われた行事の一つで、全国各地で行われている小正月の火祭りです。とんと、とんと焼き、とんと二歳焼きとも言われ、感徳神を祭る慣わしが発祥と考えられています。

三百年の歴史を持つ「勝山左義長」は、江戸時代に小笠原公が勝山に入封（一六九一年）以来三百年の歴史を誇っており、毎年2月24日（旧日に開催されています）が、現在は観光客や祭り主催者の利便を考慮して、二月の最終



橋の上で「チョーよハナよと」はやしと太鼓

土曜、日曜日に開催されています。

今年は、2月24日、25日の二日間、雪のない晴天の中、盛大に催されました。

愛媛地方に春を呼ぶにふさわしく延や三味線、太鼓と独特のお囃子が調和し、訪れた多くの観光客は、伝統芸能の良さと祭りを堪能していました。

## お囃子と太鼓で軽快なリズム

勝山市街地の各町内に、基の橋を建て、その上で赤い長襦袢で女装した男衆や法被姿の子どもたちが、独特のおどげ仕草で三味線、笛や鉦による軽快なテンポのお囃子にのって太鼓をたたきながら浮かれます。

こうした様子は、全国で「勝山左義長」だけの特徴であり、人々はこれを奇祭と呼んでいます。

左義長橋は、総檜作りで本体は大きいもので中約四メートル、高さ約六メートルあります。橋は入母屋造りで、二階の舞台上で左義長太鼓が披露され、浮き男たちの軽妙な演技に多くの観光客は見入り楽しんでいました。

松と竹で組まれた御神体には、感徳大明神のお札が付けられ各町内の道路上に置かれています。各町内を彩るために、赤、青、緑、黄、白など町内ごとに決められた三、四色の短冊を道路上に吊り、橋ににぎわいを添えています。

お囃子に合わせ歩いていく「作り物」や「箱行燈」なども楽しむことができます。町内ごとに競って作られる「作り物」

はその年の「干支」にちなんだ作品が多く、桶やお盆舟などの日常生活用品を素材に「にわか」的に作ったもので、シャレを折り込んだ「書き流し」(短歌)を添えて各町内の会場に展示されています。

また、「箱行燈」は、辻行燈と大行燈があり、辻行燈は、江戸時代の藩主小笠原公が、左義長まつりの「無礼講」として庶民の気持ちを川舂や狂歌にして行燈に託すことを許したと言われ、世相風刺や庶民の哀歌が詠われ、ユーモアと皮肉をおりませそれにあわせた絵が描かれたもので、大行燈は、辻行燈の約三倍ほどの大きさで、橋の下に掛けられ、人々は足を止めて「うひ」との行燈に見入っていました。



世相風刺や庶民の哀歌を詠む「箱行燈」(辻行燈)

## 「ドンド焼」でフィナーレ

25日午後八時頃から各町内の御神体が九頭草川沿いの井天楼で知られている井天河原に運びこまれ、「ドンド焼」の準備が進められ、八時半になると神明神社で採火した御神火が各区の松明に点けられ、河原に送られ、十四基の御神体に一斉に火が移されます。冬の夜空に美しく映えて燃え盛る炎は神秘的ですばらしい祭のフィナーレを飾りました。この「ドンド焼」で神を送り、五穀豊穡、無病息災と鎮



日常生活用具を活かした「作り物」

## 左義長ばやしのしおり作成

火を祈願し、二日間わたる祭りの行事が終ります。「勝山左義長まつり」は愛媛地方に春を呼び祭りと書われ、これを境に春の足音が聞こえてきます。

これまで口と経談によって伝えられてきた「左義長ばやし」を正確に伝えようと勝山左義長ばやし保存会・木村照雄会長が、平成十八年、教則本、「勝山左義長ばやしお囃子のしおり」を作成されました。

各橋ごとに演奏法やリズムが多少違うなどばらつきがあったので、往時のお囃子を徹底的に研究し、表現法を解説するなど正確な左義長囃子の教書ができあがりました。今後とも郷土芸能として受け継がれていくためにたいへん役立ちます。

## 左義長ばやし

蝶よ花よ  
花よのネンネ  
また乳のむか  
乳くびはなせ  
乳くびはなせ

(元明)

左義長ばやしの元唄



四季源氏繪衝立一基

鶴沢 深眞 筆

- 紙本着色
- 縦七十九、二×横八十、二 cm
- 江戸後期、明治
- 落款 鶴澤法眼深眞
- 印章 「守口口印」白文方印

この衝立は二面が蝶番で接続され、その表裏、四面にそれぞれ春・夏・秋・冬の四季の景観と人物が描かれています。

春図は、桜花爛漫たる桜の樹のもと、立烏帽子に狩衣を着用した公家が、袖を打ち振って桜花を払っています。公家と相対し、折烏帽子に狩衣を着用しているのは家従で、その傍らには児童が太刀を持ち、深く膝を下ろしています。目を移すと野辺には、鼓やすぎなどの若菜が点在し春の息吹を伝えています。

また、紙面ではご紹介していませんが、夏図は辺りを飛び交う螢を追う「世狩」の情景、秋図は左右に分かれて虫にちなむ歌を詠んで争つ「虫合」か、或いは虫の優劣を争う捕虫の図と思われる。さらに、冬図は積雪した庭園の水辺に遊ぶ番の鶯などの雪景を楽しむ図となっています。

四図とも本紙の上下および中央の間に本金・青金・銀を交えた砂子を蒔き装飾性を高めています。これも見所の一つといえるでしょう。

ところで、本図四面には源氏絵を引き立てる洗練された気品のある女性が描かれておらず、どの画面にも登場する児童が、引き眉に元結い垂髪という出で立ちとなっています。このように、召使いではなく公家の子息を想定させることなどからして、全四図とも同一家族の四季の遊楽を絵画化したものと思われる。衣服は径圓な筆線ですが、衣釧はほとんど省略されて爽やかな趣となっています。

筆者の鶴澤深眞は、流祖深山から七代目に当たり、名を守保、別号に九草館があります。法眼、従六位上伊勢介に任ぜられました。明治二十六年（一八九三）六十歳没。

# 福井の文学碑

## 作家・詩人 中野重治

福井県坂井郡高標村(現在の坂井市丸岡町)一本田に生れた作家、中野重治の「文学碑」が坂井市丸岡町にある中野重治記念文庫の中庭に、東京、世田谷から移植した山茶花や夏椿、梨など四季それぞれに美しい花を咲せる木々に囲まれて建てられています。

碑には、中野重治氏が友人の娘が嫁ぐ時に贈った言葉

「蓄めるものは  
花さかむ  
花さきたらば  
實とならむ」

と刻まれています。



「ゆたかなる野の子」として、生涯をつらめいた人、中野重治

丸岡図書館には、「中野重治文庫」があり、蔵書数約一万三千冊とともに、高田博厚作の故中野氏の肖像や原稿、愛用品などの遺品が展示されています。

平成十八年十二月には、直筆の遺言や一九三二年に発刊し、時の政府から発禁処分とされ「幻の詩集」といわれる「中野重治詩集」初版など貴重な遺品七点が遺族から寄贈され一般公開されています。

### 故郷の野の人

中野重治は、プロレタリア文学の代表とされ、また、越前の風土、農村、農家の魂を根底に抱え、野の花や雑草を愛した作家です。一九五七年(昭和三十一年)中野重治作詞の「竜北中学校」校歌(現在丸岡中学校と合併)の三番の歌詞に

見よや 土と草 稲穂と麦穂  
耳はかたぶけよ

鳴鹿の川のためし 瀬の瀬の音のひびき  
冬のはやしふきでとおる 吹雪の声にああ 生むもの つくるもの  
すすむもの われら……

と郷土を誇りに育つ青少年に訴えています。

### 中野重治の生涯

明治三十年(一九〇二年)に生れ、大正三年福井県立福井中学に入学、福井市内で下宿し勉学する。大正八年福井中学を卒業、同年金沢の第四高等学校に入学、大正九年雑誌部員となり、「北辰会雑誌」の編集にたずさわり、短歌、詩、小説などを発表し、絵画、版画も製作した。人正十二年十一月に、生涯にわたり、文学上、人生観上の師であった室生犀星に金沢で初めて出会います。大正十三年二月に第四高等学校を卒業し、同年四月、東京大学独逸文学科に入学。大正十四年一月「裸像」を創刊。同年「新人会」に入り、左翼運動に関わっていく。昭和二年二十五歳で東京大学を卒業。昭和四年に「鉄の話」を『戦旗』に発表し、プロレタリア文学の指導的役割を果たしました。昭和七年四月、治安維持法違反容疑で逮捕され、二年間刑務所に収容される。昭和二十一年三月、福井県で衆議院選挙に立候補するが落選、二十二年四月、参議院全国区で当選し、国会議員になりました。昭和二十九年「群像」に「むらぎも」を、昭和三十一年に「萩のもんかきや」などを発表、昭和三十一年、五十五歳で彼の幼年時代を描いた自伝的小説と言われている「梨の花」を鮮明な記憶をもとに「新潮」に連載し、昭和三十五年に読売文学賞を受賞しました。



記念文庫の展示コーナー



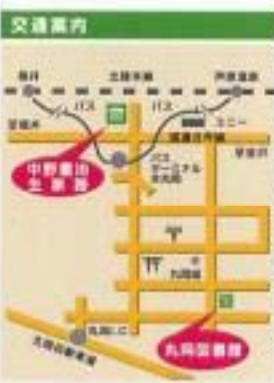
中野重治の生家跡

昭和四十四年、この作品で野間文芸賞を受賞しました。昭和五十四年八月二十四日、七十七歳で生涯を終えました。小説「梨の花」を書き、野の子を讀んだ校歌をつくり、丸岡城の無骨さと朴訥さを愛し、風雪の厳しさに男の生きざまをみた中野重治は、妻原まさのとの子供を愛し、妹鈴子を思い偉大な田舎もの「ゆたかなる野の子」として生涯をつらめられました。

### 生家跡の碑

昭和五十五年、中野重治の遺志によって丸岡町(現坂井市丸岡町)一本田の生家屋敷が丸岡町に寄贈され、東京、世田谷から移植された書斎や石碑が建てられています。また、毎年八月に「くちなし忌」が開催され、全国から中野文学ファンが大勢集い、道徳を偲ばれています。ここには、「中野重治」ここに生まれここに育つ(寺田透の書)と妹中野鈴子の詩碑「花も わたしを知らない」(重治の長女卯女の書)の二つの碑が建立されています。

本記事は、取材のほか丸岡図書館のホームページ「中野重治の部屋」と「若越山脈」第八集を参考にさせていただきました。



交通案内

## 角鹿の「魔笛」熱演

～吉田浩之プロデュースオペラ～

敦賀市出身で、今や日本を代表するオペラ歌手、吉田浩之さんがプロデュースし主演する「げんでんふれあいコンサート2006」を財団主催（日本原電・協賛）で十一月二十五日（土）の夜敦賀市民文化センターにおいて開催しました。

モーツァルト生誕二五〇年を記念して、朝鮮の王子ツヌガララシト伝説をモーツァルトの名作「魔笛」に重ね合わせた創作オペラで敦賀の名産などが随所にとり入れられ、今回一回限りの上演です。

ナレーションを同じく敦賀市出身で俳優の大和田伸也さんが友情出演し、敦賀発の華麗でファンタジーな舞台を繰り広げていました。

ピアノとフルートのみの演奏で、すばらしい歌唱力と演技で、テノールの吉田さんはタミーノ役、王女の娘パミーナ役のソプラノ歌手佐々木典子さんをはじめ一流のオペラ歌手と、吉田さんが教えている東京芸術大学の大学院生らが合



熱演する吉田さんと佐々木さん

唱で出演し、歌詞はドイツ語のため、日本語の字幕で表され、より分かりやすくなり、親しみのもてる庶



吉田さんと大和田さんに花束贈呈

民的なオペラに仕上げられて、会場の約九〇〇人の観客は、迫力のある歌と華麗な演技に酔いしれ満足でいっぱいでした。公演に先立ち吉田浩之さんから寄せられたメッセージの一部を紹介します。

今年モーツァルトイヤーである。日本各地で、いや、世界中でモーツァルトの作品が演奏され、耳にされた方も沢山いらっしやるだろう。しかしこの舞台はそこいらのモーツァルトとは一味も二味も違う。大陸から迷い込んだ若者は、ツヌガララシトと名乗るこの地に留まった。今回、自身で芸術監督を務め、上演するにあたり、「魔笛」に出合ったあの時の、あの直感とも言える思いのまま舞台を作る事はとても嬉しい。僕の思いを形にしてくれる、歌手、スタッフは僕の大切な仲間である。新進気鋭の演出家、菅尾氏、同郷のよしみで友情出演して下さいる大和田氏には感謝の意を表しきれないほどである……。

吉田 浩之

**あらすじ** 夜の女王が支配する闇の国。王は、恵と豊かな太陽の光の国を、賢者ザラストに譲り、愛娘パミーナもザラストに預けた。夜の女王は王に先立たれ、愛娘を奪われたことを深く悲しみ、ザラストへの憎しみが倍増して復讐へと燃えださる。ある時間の国に漂着した若者タミーノ（ツヌガララシト）にザラストを討たせようとする。タミーノと娘パミーナが苦難を乗り越えて成長していく物語です。



味方玄さん演じる「源融」

能楽師らを招き、第九回「能・狂言を楽しむ会」(日本原電協賛)を敦賀市プラザ萬象の能楽堂で開催しました。

財団では、日本古来の伝統芸能に触れていただくため十一月十七日(金)、観世流能役者の味方玄さんをはじめ

当日、昼の部では、敦賀市内の中学生(角鹿、松陵、西浦、東浦の各中学校)約四〇〇名が体験学習の一環として鑑賞しました。公演前に、味方玄さんから「地謡座」「後座」「橋掛り」などと呼ばれる能舞台の構成や「シテ方」「ワキ方」「囃子方」「狂言方」という役割分担など基本的な説明と演目の「敦盛」のあらすじの解説をつけ、さらに、「大鼓」「小鼓」「太鼓」などの能の囃子に

に始まり六百年を得た古典芸能で和風のミュージカルです。能は難しいという先入観をすてて、軽い気持ちで観て何かをつかんで下さい。」と語っていました。夜の部では、約三〇〇人の一般のファンが会場に集り、味方健さんから演目の解説を聞いた後、最初は茂山千三郎さんと松本薫さんによる狂言「鬼瓦」が、続いて能「群・舞返」が味方玄さんらによって演ぜられました。観客は、奥の深い能と狂言の世界へと誘われ、終りに会場から盛大な拍手が送られていました。

**あらすじ** 狂言「鬼瓦」は、領地争いの訴訟のため長らく在京していた通国の大名が、めでたく帰郷して帰郷を許され、日ごろ心する因幡屋のお薬師さまのおかげと家来の太郎冠者を伴ってお参りして大名の目にとまったものは鬼瓦でユーモアたっぷりの演技でした。能「群・舞返」は、京の六条河原院は昔、源融の左大臣が贅を尽した邸宅の跡、広大な庭園を、融の死後は荒れ果て池水は見る影もない。前半は旅の僧に汐汲みの老人が昔恋しさに語る場面、後半は、河原院の盛衰を聞いた僧は旅寝する。そこへ融が在りし日の姿で現れる。干潟は、みるみるうちに水を湛え寝殿の大屋根が美しく、深び、人々の夏の声の中。月下にただ独り、美しい貴公子源融が袖を翻して鮮やかに舞う幻想的なシーンです。

## 第9回 能・狂言を楽しむ会

その後、「敦盛」が演ぜられ、生徒たちは、能役者の姿、立ち振る舞や囃子方の演奏、地謡の斉唱を見入り、伝統ある能を楽しんでいました。味方さんは、「能は室町時代



中学生による「鼓」の体験

## 6重点施策

- 1.文化団体等の活動を支援する助成事業の充実
- 2.ふくい県民総合文化祭および県内高等学校文化部活動の支援
- 3.魅力ある文化イベント提供事業の推進
- 4.文化、芸術を愛する県民風土を高める顕彰事業の定着化
- 5.地域に根ざしたふれあい活動の推進
- 6.信頼される財団広報・広聴活動の展開

## 予算総額(一般会計)9,130万円

19年度予算は、総額(一般会計)9,130万円とし、重点施策を焦点に予算配分を行い、事業費総額7,510万円を計上。財団寄付行為で規定している事業区分の内訳は次のとおりです。

- 1.地域文化の振興事業 1,710万円
- 2.ふれあい・ゆとりの創造事業 1,090万円
- 3.芸術観賞機会の提供  
文化創造事業 3,290万円
- 4.優れた文化活動に対する  
顕彰事業 950万円
- 5.その他の事業 470万円  
(ホームページ、広報誌の発行など)

## 平成19年度 財団事業計画・予算決まる

文化の育成支援など6重点施策を展開

平成十九年度における財団の事業計画と収支予算は、三月八日に開催した第二十八回



19年度事業計画および予算案を審議する第27回理事会

評議員会と第二十七回理事会で可決承認されました。十九年度は、財団が創立されて十周年を迎えることから、今後更に発展を期すべくまた、ふくいの文化の振興とゆとりとふれあいのある地域づくりのために一層寄与することを基本方針として、ふくい文化の育成支援をはじめとする六重点施策からなる事業計画を実施することとし、これに関連する予算を編成しています。

## 第7回 日英小学校絵画交流展

「私たちの暮らし」をテーマに



日英小学生絵画交流展開会式(敦賀原子力館)



日英の友好を深めた絵画交流展(敦賀原子力館)

第七回目となる日本・イギリス小学生絵画交流展は、財団と日本原電、BNGS社(英国核燃料会社)が共催して十二月二日から十日まで敦賀原子力館で、十二月十二日から二十七日までげんでんふれあいギャラリー

(敦賀市本町二丁目)で開きました。作品展には、英国、西カンブリア地方、セラフィールド近郊の四小学校からの四十八点の作品と、敦賀市内五小学校(中郷、栗野、栗野南、黒河、赤崎)から三十九点が出展されました。

「私たちの暮らし」をテーマに描かれた作品は、家族や友達、祭などの楽しい絵画で訪れた人達は、両国の子供から見た暮らしがよくよく表現された作品を興味深く鑑賞していました。

## 第71回 福井県かきぞめ競書大会

(げんでんふれあい福井財団特別協賛)



表彰式で財団賞を受ける受賞者(福井新報社・風の森ホール)

第七十一回かきぞめ競書大会(福井新報社主催、(社)若越書道会共催、当財団特別協賛)に、小学生から大学生まで約七万一千点の応募作品が寄せられました。第一次審査の狭き門を突破した三千三百九十一人が一月二十七日に県内十三会場で

行われた「かきぞめ席上揮こう」でもう一段上の目標に挑みました。席上揮こうの作品は、翌二十八日、若越書道会員約百人が全体の構成やはねの美しさ、勢いなどを丁寧にチェックし、慎重な審査が行われました。

表彰式は、二月二十一日、福井新報社・風の森ホールで行われ、財団では、小学生推薦作品の中から伊藤侑紀さん(金津中二年)をはじめ十一名に「げんでんふれあい福井財団賞」を贈りました。

その結果、最優秀の大賞に、武生三三三年の小林まどかさんら四人が選ばれたほか、推薦一四七点、準推薦二二一点、奨励賞二二一点が決まりました。



席上揮こうに挑む小学生(敦賀市北小学校)

「活気ある地域をめざして」婦人のつどい

「人生いつもありがとう」 吉川 精一氏



「熟弁でありがとう」の吉川精一さん

「一人ひとりが力を合せ、活気ある地域をめざそう」をテーマに小浜市連合婦人会主催（当財団共催）で、十八年度「婦

人のつどい」が二月十一日、小浜市文化会館で音楽や和太鼓の演奏をはじめ多彩な内容で盛大に行われました。毎年恒例となっているアトラクションでは、市内十一地区の婦人会が仮装や衣装に工夫を凝らした踊りなどの出し物に人気が集まり、ハツラツとしたステージが繰り広げられていました。

その後の記念講演会では、元NHKアナウンサーで歌手の吉川精一さんが「人生いつもありがとう」と題し、定年後の生き方や地域活動に取組むことの大切さを親しみやすく話され、約四〇〇人のお客さんは熱心に聴き入っていました。

第9回

ふるさと大賞 写真コンテスト入賞作品展

感性豊かな作品



入賞作品を鑑賞するカメラファンたち（げんでんふれあいギャラリー：敦賀市）

当財団主催の第九回ふるさと大賞写真コンテストの入賞作品展を一月三十日から二月十一日まで、げんでんふれあいギャラリー（敦賀市）で、二月十六日から二十一日まで、ショッピングシティ「ベル」（福井市）の二会場で開きました。

会場には、応募作品二七〇点の中から選ばれたふるさと大賞

賞一点、ふるさと賞二点、優秀賞三点をはじめ五十八点の作品を展示しました。

コンテストの審査委員長の八木隆さんは、ベルの高い写真が多いです。ここにふるさとがあるふくいの感動」というテーマは今の福井を撮ることが必要なので、どうしても人物が入った写真が上位に入賞する確率が高くなったが、人物の有、無にかかわらず優れた作品を目指すことが必要です。」と総評されました。

両会場とも、多くの人が訪れ自然風景、伝承行事などを心豊かに表現された「ふるさと福井」を見入っていました。



「ふくいの感動」を見入る人たち（ショッピングシティ「ベル」：福井市）

平成18年度 県新人演奏会オーディション

若手演奏家の登竜門に挑む



日頃の研鑽の成果を発表する参加者

県文化振興事業団主催の十八年度県新人演奏会公開オーディション（当財団協賛）が、二月二十五日県立音楽堂（八

一モ二ホールふくい）で開かれました。この演奏会は、県内在住か本県出身者で音楽の道を目指す新人演奏家の登竜門となっています。

音楽系の大学生、卒業生、のほか高校生三十四人がピアノ、声楽、器楽の三部門に応募があり、規定の時間内に独奏、独唱で日頃練習を重ねた得意曲を披露しました。

審査は、本県出身の作曲家笠松泰洋さんら五人が当たり、ピアノ部門で十人、声楽部門で三人、器楽部門で三人の計十六人が合格しました。

三月二十五日に同音楽堂でオーディションに合格した新人演奏者による演奏会が開かれ、会場からは将来有望な若手演奏家が大きく羽ばたくことを期待し、盛んに拍手が送られていました。

第2回

全国YOSAKOI衣デザインコンペティションinふくい

県産繊維の衣装でよさこい舞う

「よさこい」演奏衣装の出来栄を競う「第二回全国YOSAKOI衣デザインコンペティションinふくい」（ふくいファッショントイイベント実行委員会主催、当財団協賛）の最終審査会が二月十八日、サンドーム福井で開かれました。

繊維産地福井を更に全国に発信するため、よさこい衣装をデザイン画をもとに福井県産繊維素材で製作し演奏を披露し競うものです。

今回、全国から六十四チームの応募がありオリジナルのデザイン画で一次審査を通過した北海道から鹿児島県までの十四チームが最終審査会に挑みました。

各チームとも演奏テーマを

盛り込んだ鮮やかな衣装で音と光に合わせダイナミックで熱のこもった演技を披露しました。

大賞には、フラメンコをイメージした赤と黒のシンブルなデザインと力強く華麗な踊りのリレント舞華軍団（北海道）が選ばれました。

また、優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞は、地元福井の明新森組が受賞しました。

デザインコンペティションinふくい



華麗でダイナミックな踊りの「リレント舞華軍団（北海道）」

## 平成19年度財団助成の団体を募集 申請期限4月30日(月)

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて助成をしています。平成19年度において文化活動等の事業を行うため、財団の助成を受けたい団体を募集しています。

### 対象団体の要件

1. 福井県内に活動の本拠を置く団体
2. 構成員(会員)が原則として20名以上の団体
3. 平成19年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
4. 営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
5. 特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

### 応募の方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を4月30日(月)まで(申請事業の実施が4・5月の場合は3月31日まで)に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは「げんでんふれあい福井財団」にお問合せ下さい。

## 読者アンケートご回答のまとめ

## げんでん 福井第25号

本誌第25号のアンケートに総数33通のご回答をいただきありがとうございました。その結果を下表のとおりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願いいたします。



### 第25号で良かった記事は

- 岡倉天心・京「茶の本」出版100周年 記念事業を開催 19%
- 福井県自然保護センター訪問 12%
- ふるさと福井人物シリーズ 「若狭の杉田玄白(下)」 19%
- 第17年度風花随筆文学賞・財団賞 受賞作品紹介 13%
- 伝統芸能シリーズ 「宇波西神社の神事芸能」 19%
- 福井の文学碑 「放浪の俳人種田山頭火句碑」 11%
- 敦賀市博物館誌上ギャラリー/19 「小野小町園」 12%
- 情報ファイル 7%

### 本誌への主なご意見

- 風花随筆文学賞を読み感動しました。
- 鑑賞したふれあいコンサートの記事が掲載されていて再度感動することができた。
- 福井の歴史の勉強にとてもよい。
- 宇波西神社の神事について、すべてよく理解できた。
- 地元のことを色々な角度から取り上げてあるので愛着が深まる。
- 写真が美しく記事も読みやすい。
- 活字を大きくして欲しい。
- ふるさと人物シリーズを本にして欲しい。
- こういう時代になっても、伝統あるものは次の時代に伝えていかなければと思った。

## 財団イベント INFORMATION

文化講演会	講師 村山 貢司氏 (気象予報士)	5/19(土)	敦賀市 敦賀市男女共同参画センター	つるが男女共同参画 ネットワークと共催
エン杰 中国琵琶コンサート	エン杰&中国女子楽坊	6/8(金)	福井市 ハーモニーホール(小ホール)	福井文化事業振興 事業団に協賛 入場料4,000円
文化講演会	講師 梶浦 梶子氏 (タレント・DJ)	7/1(日)	福井市 福井県生活学習館	福井県連合婦人会 と共催
げんでんふれあい コンサート2007	「美輪 明宏」 コンサート	7/10(火)	福井市 福井フェニックスプラザ	入場料2,000円

